

日本近世窯業史(ガラス工業)口語版

(株)機能性ガラス研究所 藤田 卓・編修



第九回

(2)大阪地方

④ 理化学用品及び医療用品類

食器、燈用品、壺類等の工場が盛況であることに比較して、理化学用品及び医療用ガラスの製造に関わる工場は限定的である。これは土地柄という面があるかも知れないが、市場での実需要による部分が大である。これらの製造に関わる者として次の斯業者を列挙する。

- * 手島爲次郎 西区靱北通 2-1
- * 朝野劔次郎 北区末廣町 2
- * 島谷庄助 西区阿波座中通 2-56
- * 手島當次郎 南区北桃谷町 16
- * 門垣重吉 東区伏見町 5
- * 川原菊蔵 西区阿波座上通 2-4
- * 田淵吉太郎 西区阿波座下通 1-188
- * 松村文三郎 北区壺屋町 99
- * 鈴木福太郎 南区難波稻荷町一丁目
- * 石木正二 北区南同心町 1-677
- * 村尾福松 東成郡鯉江村字新喜多
- * 松井槌次郎 西成郡豊崎村字南長柄
- * 松井浅吉 北区本庄葉村町

この内、手島當次郎の工場が最も古く、父佐兵衛が慶応三年一月に、ビイドロ工場を開き、玩弄品を製造したのが始まりである。後に薬壺及び洋灯用油壺並び火舎の製造に移り、次いで弟の政七と共に医用器スポイドの製造を進めた。明治八年頃には広島津川宇久と共同で舷灯用紅色硝子製造を企画したが許可が出ず、医療用品の製造を専業とする。その他、度量計の製作者として三原彌蔵、国吉治三郎、佐々木亀太郎、深尾豊次郎、国吉友鶴等がいた。

⑤ 珠玉及び薄物類

ガラス製珠玉類は装飾又は玩弄用として生産されていた。大阪ではこれを硝子玉、南京珠、光珠、薬珠、水珠等に区別されていた。中国、東南アジアに輸出されたのは光珠であり円形、多角形のものがあり、これに金銀等の彩色を施して花簪への飾り、帽子、衣装飾り、婦人の耳飾り等に使用された。大阪における本品の製造は泉州地域において進められ、堺市の鉛市兵衛等が製造した硝子生地を使い、農家が副業のような形で発達したが日清戦争(1894~1895)後には輸出需要が拡大し、日露戦争(1904~1905)の頃には更に拡大する。明治42年(1909)において斯業従事者として次の通り挙げられる。

- * 大井作兵衛 南区難波櫻川町 1-1035
- * 北田喜十郎 南区高津四番町 54
- * 今井岩吉 南区松屋町 22
- * 宇杉喜市 南区瓦屋町一番丁 394
- * 堀野種吉 南区田島町 28
- * 宮本政吉 南区高津四番町 4
- * 城野八十吉 北区西野田東ノ町 1172
- * 高島種次郎 南区空堀町 33
- * 新居興太郎 南区空堀町 62
- * 岡部才次郎 南区天王寺下寺町番外 2352
- * 小林吉太郎 東区寺山町 775
- * 堀田庄次郎 東区上本町九丁目
- * 塚田龜太郎 泉北郡伯太村大字池上
- * 米田若松 泉北郡伯太村大字南王子
- * 福井安太郎 南区天王寺生魂前町 488
- * 細川多次郎 南区天王寺真法院町 5694
- * 井上庄吉 南区東平野町 9-99
- * 丹羽忠兵衛 東区南久寶寺町一丁目
- * 山名和太郎 南区天王寺下寺 3-4770
- * 吉田嘉市 南区天王寺下寺 3-4770
- * 中道満須 南区高津四番町 85

* 大井徳次郎	南区難波反物町 1329
* 佐野治兵衛	南区瓦屋町三番町 69
* 松若貞造	泉北郡信太村大字太
* 本間彌平	東区上本町 9-5395
* 西村辰蔵	南区天王寺生魂前町 377
* 村上龜次郎	南区天王寺逢阪下町 4542
* 中村米三郎	泉北郡信太村大字王子
* 菅野伊三郎	西区鞠南通 2-62
* 金谷聰一	南区天王寺勝山通 3-6
* 杉本徳松	南区鍛冶屋町 41
* 桐野吉太郎	泉北郡信太村大字尾井
* 辻田慶蔵	南区高津四番町 75
* 山根友一	南区河原町 2-7258
* 市原庄吉	南区椎寺町 5-12
* 芦田長八	南区木津敷津町 1007
* 奥田作太郎	泉北郡信太村大字太
* 畑山清吉	南区難波稻荷町 3-899
* 鷺ノ森為蔵	北区本庄横道町 1141
* 山本啓治	南区日本橋筋 4-79
* 飯田政太郎	南区北桃谷町 7
* 堀清一	南区南桃谷町 13
* 古家清吉	南区日本橋筋 1-4659
* 岡田音五郎	西成郡今宮村大字元木津
* 今井捨蔵	南区下寺町 3-4725
* 榊田勝次郎	南区木津敷津町 17
* 信野興三郎	南西下寺町四丁目
* 伊藤五一郎	南区勝山町 2-5875
* 岡野市助	南区天王寺生野西國分町 134
* 紺谷永吉	南区恵比寿町 3-168
* 安藤兩平	南区勝山町三丁目
* 廣野市次	南区天王寺大道路町四丁目

- * 福井政蔵 南区天王寺生魂前 5216
- * 垂水栄蔵 東区平野町 4-120
- * 井上松蔵 南区勝山町 5-880
- * 田原次作 南区内安堂寺町 1-9
- * 中川末次郎 南区天王寺大道一丁目
- * 本多文次郎 西区本田通 2-46
- * 榊田寅吉 南区難波河原町 2-5967
- * 西井常次郎 泉北郡信太村字中
- * 杉本源之助 泉北郡信太村字上
- * 有本米太郎 泉北郡伯太村字池上
- * 南亥三郎 泉北郡伯太村字池上
- * 寺阪政吉 南区難波稻荷町 2-962
- * 吉田平次郎 東成郡北新開荘村字鴨野二軒家
- * 玉木鹿市 南区天王寺大道 3-4220
- * 阪田才次郎 東区味原町 76
- * 太田善吉 三島郡吹田町字都呂須
- * 日下十九造 三島郡同町字南町
- * 今村源一 南区天王寺大道 4-3120
- * 大阪谷政吉 南区生野西國分町 134
- * 近松喜代槌 三島郡吹田町 514
- * 大野正助 東成郡鶴橋村大字木野
- * 中島忠次郎 南区難波櫻川町 1-1066
- * 仁和寺定次郎 南区難波櫻川町 1-1066
- * 中村友吉 南区天王寺川堀町 2411
- * 松谷寛次 南区天王寺勝山町 1-2901
- * 輪島清三郎 南区天王寺廣田町 907
- * 川脇音吉 東区川西町 564
- * 中西伊之助 南区勝山町 2-5881
- * 美濃捨吉 南区勝山町 2-5881
- * 森傳蔵 東成郡鶴橋村字木野
- * 岸本卯之助 東区東筭谷町 767

- * 金谷駒吉 南区椎寺町 5-60
- * 古井延一 南区天王寺六萬體町 5234
- * 大西栄蔵 南区勝山町 2-5875
- * 立花伊一 東区宰相山町 142
- * 北口久吉 東成郡中本字中道
- * 渡邊久吉 南区天王寺田町 3591
- * 尾崎徳松 西成郡豊田村字橋寺
- * 川脇鶴松 東区東高津町北之町 76
- * 原文之助 南区難波河原町 2-1463
- * 山本直吉 南区難波新地六番町 185
- * 原安松 南区難波河原町 2-1453

これらの製造者を合わせると 100 軒ほどになり、業界生産額は当時の金額で百万円ほどになっていた。大阪泉州地域には江戸時代から斯業に従事する業者が存在したといっても、大部分の大阪市あるいは隣接するところで運営するものは、日露戦争後の熱狂的な需要発生による参入が主であった。古くから継続して工場の整備をしていたのは大井徳次郎、宇杉喜市、宮本政吉、今井岩吉、北田喜十郎、新居興太郎、米田若松、小林吉太郎等をはじめ十数軒に過ぎず、特に徳次郎、喜市、政吉等は明治 39 年に於いて彼らの父が創業し、珠玉、薄物類の製造を始めた。しかし、粗造品が多く出回り信用を失墜するようになる。明治 45 年に日本光珠同盟会を組織し、斯業の改善を計ろうとの試みがなされるが、結果的には倒産等があり市場淘汰が進むことになる。この辺は自業自得とはいえ、斯業の状況としては悲しむべきことと言える。大井作兵衛にしても同様の状況であった。先代の作兵衛は明治 10 年(1877)にガラスの小細工品の製造を始める。二代目作兵衛に事業を譲り、製造は弟の徳次郎が主として珠玉類の製造を管轄する。作兵衛は大阪府硝子製造同業組合長として明治 36 年、更には日露戦争後にも印度及び南洋に渡航して市場調査している。それにより光珠の需要増加を確信し事業を拡大させていたが、模造品が多く出回り、特許侵害訴訟を起こすが収拾がつかず、市場淘汰に向かう。そのような中で作兵衛は大正元年(1912 年)にも職工 13 人を引率し印度に渡り、ボンベイ市から大きく離れたタレゴンで欧州人より硝子工場を譲り受ける。

そこでは高額で販売できる品種を選んで製造を行なった。大正三年(1914年)には、デリー市より遠く離れたアンバラーに移り、ドイツ人の経営する工場を譲り受けて新たに事業展開を進めた。作兵衛は立派な企業家と言える。作兵衛が印度に渡った後は、徳次郎が難波反物町に営業所を設けて腕輪及び真珠玉等の製造・販売を行なっていた。

前述の腕輪及び疑似宝石類について専用工場を有していたのは渡邊朝吉、大井徳次郎位で、その他は細かな珠玉類製造者が転業的に対応していた。薄物の壇、玩具、簪、笄等と兼業的に製造していた業者のうち宇杉喜市、宮本政吉、高島種次郎、新居興太郎、岡部才次郎、小林吉太郎、山名和太郎、本間彌平、菅野伊三郎等が主な業者である。この中で薄物の壇及び玩具類は価格競争を競う商品である一方、使用に際して危険性があるとして明治40年頃に一時的に警察令により製造を禁止されることがあった。

南京珠に関しては有望商品との見方があった。簾珠の類は堺市が本来の主要生産地であったが当時の経済環境が良くなかったため、農商務商が南京珠製造機械を堺市の硝子業者に貸し出して奨励していた。

⑥ 特種品及び生地類

顕微鏡用検査用デッキ硝子(カバーガラス)及びオベクト硝子(スライドガラス)についての専門製造業者は泉南郡岸和田町松浪定吉、東区内久寶寺町二丁目服部政次郎、南区東新瓦屋町木村又兵衛、東区東雲町二丁目市場谷庄平等が主な製造業者である。その中で木村又兵衛、松浪定吉の両工場は開業の年月が極めて古い。

当代、木村又兵衛の祖父は寛政年間(1789~1801)に河内から大阪に移り住み眼鏡生地製造を開始する。次に磁石の蓋硝子及び鬢鏡(手鏡)の製造を開始した。その子の又兵衛の代に至り、更に細菌学用のデッキ硝子の製造を開始した。日本に於いて、この製品の製造販売創始者であった。明治20年頃まで従来法により肥後産白色の石を粉末にして、これに鉛を八掛けに混入していた。信楽製坩堝に投入し熊野炭で熔融していたが、その後上質なカレットを使用するようになった。また当初はデッキ硝子の切断には目立鑪の廃物を集めて鋸のように磨いて使用していたが、明治25年頃より金剛石で切断する方式に改善を進めていたのである。

一方で松浪定吉は祖父である藤助(藤右衛門)が薄玻璃と呼ばれる材料製造で弘化元年に創業したが、明治 22 年頃までは鬢鏡を製造し、明治 37 年頃までは簪及び簾等を製造していた。デッキ硝子は定吉の時代になってから製造することになるが、明治 37 年よりこの事業を専業とするようになった。

硝子生地は北区東梅ヶ枝町の渡邊朝吉、堺市市之町の鉛市兵衛、南区御蔵跡町の安田捨次郎、東区南本町一丁目の石原休次郎等工場での生産量が多かった。特に渡邊朝吉の有色硝子生地、鉛市兵衛の鉛硝子生地は高く評価されていた。

⑦ 硝子鏡類

硝子鏡の素材である板硝子は明治に入り殆ど輸入に頼るようになる為、硝子鏡製造業者が硝子製造業者と言えない時代になる。しかし板硝子の輸入がない時代において硝子鏡の製造はなされていた。弘化元年に松浪藤助は大阪の泉州地域で硝子工場を設立し、珪石、鉛、ポッタース及び石灰等を原料とし薄物硝子加工を業としていたが、その後 鬢鏡製造に参入する。庄屋メンバーの調停で鬢鏡の元請業者として承認を受けたのは安政三年のことである。鬢鏡は銅板等を用いて枠を作り薄板で鏡の蓋として、この蓋を開けば蓋は蝶番となり後方背面に廻って鏡立てとなる構造で枠及び蓋には花鳥等を描く。鏡は極めて薄い凸面硝子に水銀を塗り、薄紙を貼り実態よりは小形に映るように工夫する。この鏡が登場するまでは取手付きの砲金製の円板を研磨し水銀を塗布する方式で製造されていたので高価なものになっていた。新しい方式の鬢鏡が生産されて以来、低価格で軽いということで婦女子から歓迎されていた。この方法は一時的には普及したので新規参入に対するもめごととも発生していたのである。松浪藤助の用いた方法は円筒状に硝子玉を吹き、これを短冊状に切り開いて加熱して展延処理するもので藤助の独自性ある方式だという。

しかし、板硝子の輸入が進み、従来法での製造は衰退に向かう。一方で輸出向け硝子鏡の改良に関しては、浪川清助及びその子虎之助の功があった。彼らは大硝子面に銀を付着させる技術を開発した。更に硝酸銀を使用し、海外品に対抗できるレベルとした。資本金拾五萬円を以て日本玻璃鏡株式会社を大阪に設立し同業者も増加した。この業界も日露戦争後は粗製乱造の傾向が見られたが、全体的には大阪のメイン企業を主とした隆盛という状況であった。

《解説》

「⑥特種品及び生地類」の項に挙げた顕微鏡用デッキ硝子とオベクト硝子に注目したい。デッキ硝子というのは、ドイツ語読みを使った言葉であるが、今で言えば病理検査用カバーガラスのことである。一方でオベクト硝子もドイツ語読みを使用しており、病理検査用スライドガラスのことである。検査用の顕微鏡自体はドイツからの輸入品が使用されていた。デッキ硝子、オベクト硝子は消耗品であるが、当初はドイツから輸入されていた。この種の薄ガラス製造のベースになる技術については、基本的には西欧諸国も日本もこの時点では大きな差異がなかった。重要なことは、技術改良等を継続して行ない、マネージメント的にもうまく継承できた企業が生き残っている。日本では最初にデッキ硝子の製造に、**木村又兵衛**が熱心に取り組んでいた。1895年(明治28年)の第4回内国勸業博覧会(京都)にデッキ硝子を出展し、進歩二等賞を受賞した。更に1903年(明治36年)の第五回内国博覧会(大阪)でも同様の出展があり二等賞を受賞した記録が残っている。

しかし、そのような事業で最終的に**成功した企業は木村又兵衛の後継者ではなかった**。この辺は事業継承の難しさを示していると言える。

その後の項には「⑦硝子鏡類」が挙げられている。松浪藤助(藤右衛門)が硝子鏡を製造し、松浪藤七に継承されたが、更に事業の方向性を変えたのが前項で登場した松浪定吉が取り組んだデッキ硝子、オベクト硝子であった。時代が変わってもトレンド変化の先を捉えているかがポイントなのである。私は昨今2014年に、海外でこの業界の最大数量生産企業を実地確認した。世界には、違った視点で将来を夢見る企業があることを感じた次第である。

その他、この回に登場した**米田若松**とか**垂水栄蔵**という人物は現在のガラス産業界に何らかの形で継承されているが、キーになっていた人物達である。

2024.3.12 藤田卓 記

次回の**第十回** 「(3)其他諸地方」に続く